

伝統と古き街並みを 残すスコットランド



澤井 健吾 (さわい けんご)

前・在エディンバラ日本国総領事館副領事

2002年北海道開発局入局。2013年3月～16年3月まで、在エディンバラ日本国総領事館の副領事として、各種広報および文化事業の企画・立案・実施に携わり、日本語教育、現地学校の教育広報およびJETプログラム（ALT派遣プログラム）を担当。現在は北海道開発局網走開発建設部道路計画課道路計画専門官。

1 はじめに

スコットランドというイギリスにある地域をご存じでしょうか。私が赴任した時は日本ではそれほど知られていなかったように思いますが、スコットランドが舞台となったNHKの朝の連続テレビ小説「まっさん」が人気を博したことやイギリスからの独立を問う国民投票が日本のニュースでも連日取り上げられるなど、以前よりスコットランドに関する話題に触れる機会が増えたのではないかと思います。それでも、いまだそれほど知られていないスコットランドについて、紹介したいと思います。

2 スコットランド概要

スコットランドは、イングランド、ウェールズ、北アイルランドとともにグレートブリテン及び北アイルランド連合王国（United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland）を構成する一地域を示します。歴史的には、1707年にイングランド王国と統合するまでの8世紀以上に渡って独立した国家でした。スコットランドはグレートブリテン島の北部を占め、北緯55度から60度に位置します。北海道が北緯41度から45度に位置していることから、ずいぶん北にあることがわかります。そのため、寒地を想像しがちですが、実際は暖流であるメキシコ湾流の影響により、年間平均最

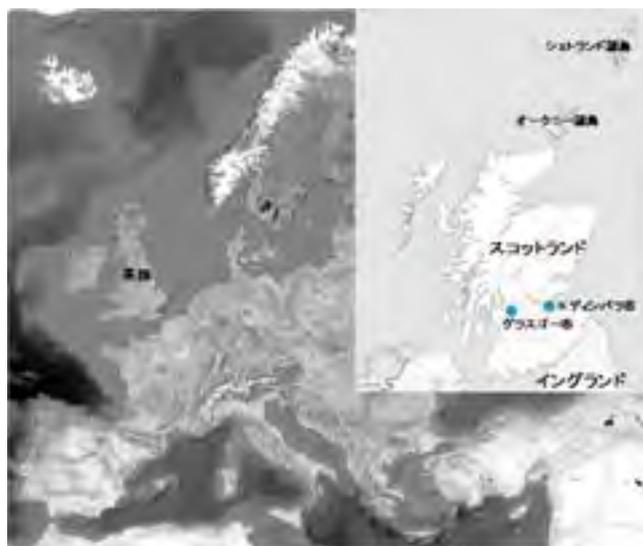


図1 スコットランドと周辺国

高気温は6℃（1月）～18℃（7月）で、年間通して冷涼ではありますが、年較差が小さく平坦な気候といえます。面積は、約7.8万km²で英国全体の約3分の1を占めていますが、人口（約529万人）は英国全体の約8.4%に過ぎません。面積・人口ともに北海道とほぼ同規模で、自生している植物や生息動物なども北海道と似ており、多くの共通点があります。主要な都市は、南西部に位置するグラスゴー市が人口約60万人、エディンバラ市が約50万人であり、スコットランドに住む在留邦人1,500人の内、約7割程度がこの2都市もしくはその近隣地域に集中しています。

3 国民性・文化・日本との関係

英国はそれぞれの地域によって、統治していた民族や範囲が異なるため、今日においても、文化的な違いがあります。スコットランドでも同様に、歴史的背景の違いから、地域によって、多少の文化の違いを持っています。

スコットランドは歴史的には、グレートブリテン島北部に最初に住んでいたピクト人と、後から島を渡ってきたケルト系のゲール人が融合して、最初のスコットランドが形作られました。7世紀頃にはゲルマン系のアングロ・サクソン人が南から侵入し、9世紀頃にはスカンジナビアからのヴァイキングが侵入、南をイングランドと接していた地域ではブリトン人が次第



ハイランドにある最も小さな蒸留所

に組み込まれていき、今日の文化圏を形作っています。ハイランドと呼ばれるスコットランド西部から北部にかけての地域では18世紀までゲール語を話しており、今でもゲール文化が継承されています。グラスゴー市やエディンバラ市などの主要な都市があるローランドと呼ばれる東部から南部にかけての低地帯は、歴史的にはイングランドを含む英国文化の影響を大きく受けた地域です。また、イギリスで最も北に位置するシェトランド諸島やオークニー諸島は、15世紀までスコットランドではなく、ノルウェイやデンマークなどのスカンジナビアの統治下にあったため、そのルーツの影響を残したグレートブリテン島とは違った文化を持っています。しかし、現在のスコットランドでは程度に差はあれ、多くの人がスコットランド人（スコティッシュ）であるというアイデンティティーを持っています。また、長年のイングランドとの戦いの歴史の中で、統合から3世紀を経た現在でも、自分は何人かの問いかけに対して、英国人を表すブリティッシュと答える人は少なく、スコティッシュであると答える人が圧倒的多数です。英語の訛りはイングランド人（イングリッシュ）と違って、外観からはその違いを見分けることは、正直、難しいのですが、愛嬌があり、情が厚く、素朴で実直な印象の人が多く、国民性はどこか北海道に似ているように感じます。

冒頭で触れたとおり、日本ではそれほど知名度が高くないスコットランドですが、日本との関わりは意外と深く、長崎にあるグラバー邸で知られているトーマス・グラバーは、スコットランド北部のフレザーバラという町の出身で、キリンビールや三菱などの創設時に尽力した人物です。また、明治維新で活躍した長州ファイブ*1が英国に留学する際も多大な支援を行っています。当時、日本で創設されたばかりの大学には、いわゆるお雇い外国人として、スコットランドから多くの教師が日本に渡り、当時の最先端の技術や社会制度を教え、日本の近代化に大きく貢献しました。

その背景には、当時のスコットランドは産業革命に

*1 長州ファイブ

幕末期の文久3（1863）年、長州藩が西洋文明を学ばせる目的で、幕府に隠して英国に派遣した、伊藤俊輔（博文）・井上聞多（馨）・野村弥吉（井上勝）・山尾庸三・遠藤謹助の5人の藩士の通称。長州五傑。



エディンバラ城（旧市街グラスマーケットから）

よる近代化を英国のどの地域よりも早く成し遂げ、世界の先進地だった事が挙げられます。

現在、スコットランドで姉妹都市提携を通して、交流している都市は、エディンバラ市が京都府と、トーマス・グラバーが幼少期に育ったアバディーン市は長崎市と提携しており、活発な相互交流を行っています。また、ニッカウキスキー創業者の竹鶴政孝の妻リタ・コーエンの出身地であるイースト・ダンバートンシャーは北海道余市町と提携しています。

4 経済関連

スコットランドは、産業革命から戦前までは、グラスゴーを中心に鉄鋼、鋳業、造船、繊維産業で英国の工業拠点でしたが、重厚長大型産業からの産業構造が転換していく中で、現在は金融、不動産、ビジネス・サービス等の第三次産業が景気の牽引役を果たしています。対外国への主な輸出品目は飲食料、法律会計サービス、石油化学製品であり、この中で、スコッチウイ

スキー、酪農製品、海産物などが飲食料の上位品目を占めます。また、北海油田からの石油化学製品も主要な輸出品目です。日本は輸出相手国としては第20位（EU圏を除くと9位）で、上位を占める輸出相手国ではありません。日本には主に機械製品、ウイスキー、毛織物等が輸出されており、輸出額は最近、増加傾向にあるので、現地の日系企業も増加していることも合わせて考えると、今後、経済的な結びつきは深まる可能性が高い。他の英国地域にはスコットランドからは金融・保険、卸売・小売などの第三次産業を主に供給しており、対外国への輸出総額の約2倍の国内供給額の規模を有しています。

5 首都エディンバラ市

エディンバラ市はスコットランドのローランドに位置し、フォース湾に面した主要都市で、15世紀から英国に統合する18世紀まで、スコットランドの首都であり、現在もスコットランド議会が設置されるなど、政治・経済の中心地の役割を果たしています。古い建造物が残るエディンバラの中心地の旧市街（オールドタウン）と新市街（ニュータウン）はいずれも歴史保存地区に指定され、ユネスコ世界遺産に登録されています。そのため、世界各地から観光客が訪れる観光都市の一面も持っています。ハリーポッターの作者として世界的に有名なJ・K・ローリングは、旧市街にあるカフェでハリーポッターを執筆したと述べており、旧市街にある様々なものから、インスピレーションを受けたといわれています。旧市街では、映画の中で登場する町並みと似た中世のスコットランドの雰囲気を感じることができます。18世紀前半に人口密度が過密で、旧市街が手狭となり住みにくくなったため、18世紀後



旧市街にあるロイヤルマイル（西端のエディンバラ城と東端のホリールードハウス宮殿までの通り）

半から建設が始まった新市街は、一部に新古典主義を取り入れたジョージ朝の建築様式*2で統一された町並みの市街地で、現在も商業の中心地となっています。

エディンバラ市は毎年、多くの観光客が訪れる観光資源に恵まれた都市で、古くから観光戦略を成功させてきた実績があります。エディンバラ3大祭りといわれるエディンバラ・フェスティバルやフリンジ・フェスティバルおよびミリタリー・タトゥーは現在、世界から多くの観光客を集めるイベントに発展しています。開催期間の7月から8月にかけてはエディンバラ市内の宿泊施設が予約できない程の賑わいで、日本からも多くの観光客が訪れます。また、年間通して多くのイベントを開催することで、当地を訪れる観光客数



アーサーズシートを昇る朝日

は毎年、増加の一途をたどっており、現在、インバウンド観光に力を入れている日本としては、エディンバラの成功から学ぶべき点が大いにあると思います。

6 おわりに

スコットランドで生活した約3年間は結局、日本に一度も帰国しませんでした。もちろん、海外での生活で、全てに不便を感じなかった訳ではありませんが、日本では経験できない生活の充実感と

居心地の良さがあり、日本への里心を抱くことはありませんでした。英国は先進国の一つであっても、日本ほど全てのサービスが行き届いた便利な社会ではありませんが、だれもが自然体で自由を享受できる社会で、ストレスが少ないところに魅力があります。また、先にドアを開けた人が、後ろから来た人のために開けたまま待つという文化が根付いていることは有名な話ですが、これ以外の事でも、人への配慮や尊厳という面で、感心させられることを多く経験しました。英国での生活で受ける快適さは、成熟した社会で、相互に人権への深い理解を持つことによって、生み出されているのではないかと考えます。

*2 ジョージ朝の建築様式

イギリスのジョージ1世から4世までの時代（1714～1830年）の建築・工芸等の様式。古代ローマ建築の構造を重視する簡素な古典的様式。